

教務補佐員の導入は意味があったのか？

以下の「はしがき」にも詳しいが、現時点では大いに意味があったと解釈している。とはいえ、真の効果は今後数年後に表れる、としか言い様がないのがもどかしくもあり、怖れる事柄でもある。

しかし、これにも幾つかの留意すべき事柄があって、全く幸運にもそれらの留意事項が今年度のI類M組の講義では満足せられていたことによる。

教務補佐員としての良い資質を持った人を得られたこと、
TAとしても教育に熱心で学力が高い人を得られたこと、
講義をする教官が教育と言う行為に相当の熱意と努力を傾注したことである。

この最後の人とは、この講義録を書いた人自身だから、この表現は自画自賛で妙かもしれないが、少なくとも後ろ指を差すのが大好きな人々も、差しにくい程には「やるべきことをした」とは思っている。

教務補佐員やTAについては、例えば、他大学の然るべき人を探して仕事を依頼できるのか？少なくともTAについてはそれは制度上難しいかもしれない。すると、今後大いなる問題が残されている。

大学院重点化以降、東大を始め他大学でも多くの修士を入学させ、博士についても同様になっている。その結果、学力不足で大丈夫かという大学院生をさえ修士、博士課程学生としているのが現状である。すると、教育現場の実践を踏みたいという少数のしかも実力をもった院生を確保するための院生へのインセンティブをどうするかが、大いなる問題になる。米国におけるTA制度では、学生への経済的見返りは極めて高額な学費の無料化であるときく。それに引き換え、東工大での学生への経済的見返りは極めて安く、コンビニでの時間給と同等である。これでは、TA制度を導入していると言うにはおこがましい！

ここに、今年度講義、演習に参加、協力して下さった人々、

田辺、永幡、野口、山田、葉梨の諸氏

に感謝する。

最後に、スエーデンでの教育と称しあるところに述べられていた文章¹を引用し、つい知識を伝達することにのみ力を注ぎがちな日本の教育現場にいる者²として、少なくとも「他山の石」としておきたい。

要約：スエーデンでは各々の人間はかけがえのない能力をもっている。そのかけがえのない能力を各人に発揮させることを重視するので、教育現場でさえ「決して教える」ということをしない。

人は誰も教えることは出来ない。

人間は自分で学ばなければならない。

できることはただ、適切な動機付けをし刺激を与えることしかできない。適切な動機付けさえすれば、人間は誰でも恐ろしい勢いで学んでいくことができるはず。

%%%

2001年度後学期から「教育環境充実」施策の一環として1年次数学教育演習時間への教務補佐員の投入が実施された。これは2002年度のI類M組への講義、演習記録である。この施策を促進して下さった理学部関係者への報告であり、ここに気持ちよく仕事ができる環境を整えて下さったことに感謝する。

¹神野直彦「人間回復の経済学」学士会報 No839(2003-II)p.39

²「黒板に向かって喋り書いているだけの人」「いい加減な人」「学生のやる気を出るまで待てる人」等色々な「教師」がいる。これらを峻別できる力を学生諸君にはもって欲しいものである。その一つの表現形態が「学生による授業評価」だからこそ、学生自身が考え、実施しなくてはならないのだが、東工大では当局が評価表を学生に配付する！それが妙だとも感じない人々！